

正量部の仏伝の伝承研究：『大いなる帰滅の物語』 第1章1節～3節の翻訳と研究

岡野， 潔

九州大学大学院人文科学研究院哲学部門インド哲学史：教授：インド仏教

<https://doi.org/10.15017/6490>

出版情報：哲學年報. 65, pp.1-38, 2006-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

正量部の仏伝の伝承研究

——『大いなる帰滅の物語』第1章1節～3節の翻訳と研究——

岡野 潔

略号：T = 大正蔵；Bc = Buddhacarita；MSK = Mahāsamvartanīkathā；

Mvu = Mahāvastu；Lal = Lalitavistara；SBhV = Saṅghabhedavastu

本論文は Mahāsamvartanīkathā 『大いなる帰滅の物語』の最初の部分、第1章1節～3節の翻訳と研究を行なう。第2章4節～第4章1節と、第5章2節～4節についてはすでに訳と研究を公表した^(註1)。

MSK は最初に siddham の印が書かれ、「一切智に帰命する」という祈りの言葉で作品が始まる。第1章の第1節は4詩節しかない。その最初の詩節は見事な maṅgala 頌である。第2詩節から第4詩節において、この作品を製作した意図が作者 Sarvarakṣita 自身によって語られる。作者自身が姿を現わすのは、この作品の最初と最期だけ、つまりこの第1章第1節と、第6章の第4節の終わりだけである。

第1章の第2詩節で「仏陀が語られた世界の生成展開期と帰滅期の法話 (vivarta-samvarta-kathā) が [私により] 再話される (anuvartnyate)」と語って、作者はこの作品において自分がなそうとすることは、仏陀が説かれた世界の生成展開期と帰滅期の法話を自分の言葉で語りなおすことであることを読者に告げる。この、世界の生成展開期と帰滅期の法話、つまり仏陀の説法という作品の本体部分は、MSK の第2章1節から始まり第6章3節で終る部分にあたる。その法話を包んでいる外枠の部分にあたる第1章1節～4節と第6章4節は、その法話の外に立って、その法話を解説するために作られている。

第1章2節と3節は、仏陀によってその法話が説かれるまでの歴史、つまり仏伝である。まず仏陀自身の歴史があって、その上に説法が成立したのであるから、説法の由来として仏陀の伝記を Sarvarakṣita は語ったのである。また第

1章4節は、なぜこの説法が仏陀によって説かれねばならなかったのか、その状況を明らかにするために、その説法が現われる前に闇のように存在していた外教の様々な見解を明らかにする。それらの愚かしい種々の哲学的見解を打ち破るために、仏陀によって法が説かれたのである。このように、第1章は2節から4節まで、説法そのものの由来を明らかにするために作られている。そのため、作者はこの第1章を「[説法の] 由来の章」(nidānakāṇḍa)と名づけた。

第1章は、他の五つの章と同じく、四つの節(viśrāma)から成る構成をもつ。第1章の第1節は「序」(upodghāta)、第2節は「王子が現われる (kumārodaya)」、第3節は「仏陀たることに達する」(buddhatvādhigama)、第4節は「外道の摧伏」(tīrthya-parājaya)と名づけられている。

今回は紙数の制約もあり、論文に第1章の第4節の翻訳と研究を含めることは出来なかった。第1節から第3節までを扱う。本論文の第一部、翻訳では、私の校訂本 Okano (1998) に基づき、第3節までの MSK の翻訳を行う^(註2)。第二部、研究では、特に第1章第2節と第3節の内容、つまり正量部の仏伝である部分について、仏伝素材の伝承を詳しく吟味する。

第一部 翻訳 MSK 第1章1節～3節

第1章第1節 序

一切智に帰命する。

2 [1.1.1] 最高の美を創造することでは創造神(ブラフマー)に勝り、闇を消散せしめることでは太陽をも凌駕し、暑さ[の苦しみ](煩惱)を追い払うことでは快い月にも勝る、この世に匹敵する者のない、かの修行完成者(阿羅漢)に拝礼する。

[1.1.2] かの上方(仏陀)が人びとの益のためにお説きになった、世界の生成展開期と帰滅期の法話を[私は]再話しよう。なぜなら[今や]明示される

べき [時] であるにもかかわらず、沈黙に依拠しているならば、[その者は] 最高の正しい路に赴くことがない。

[1.1.3] この [法話] は、まるで燈明の炎のように、人間を支配する無知の闇を消散させる。この [真理の炎が] 照らし出す時に、それから顔を背け続けることは、賢者にふさわしいことではない。

[1.1.4] [この] 法話は教えが説かれるに至った] 由来をもち^(註3)、すばらしい美を有する。まるで蓮の花が白く輝く蓮根とつながっているように。それゆえまず初めから、[耳に] つけた耳飾りのように、耳にとって快いものに (語られる言葉に)、耳をかたむけなさい^(註4)。

[第1章『[説法の] 由来』における]、『序』という、第1節 [おわる]。

第1章第2節 王子が現われる

[1.2.1] まるで雲の連なりによって [囲まれる] ように、厚く高い環状囲壁の美しさによって周囲を囲まれ、高くそびえ立つ住居によって [頂が] 天空に没している [その] 都城が、大仙カピラの居場所 (ヴァストゥ) である。

[1.2.2] その [都城] は、白くて高い壘壁によって、カイラーサ山の雲の美しさに勝っており、[カイラーサ山であると] 思い違いをして近づいてきた雲たちをになうことで、あたかも [カイラーサ山であるという] 錯覚を本当に実現したかのようであった。

[1.2.3] 宝石の光線に輝くその [都城] には、貧困と同じく闇が入り込む余地はなかった。繁栄 (女神ラクシュミー) は輝いた。あたかも [女神は] 立派な市民たちと一緒に住むことに満足して、微笑んでいるかのようであった。

[1.2.4] その [都城] はどの家においても石垣・アーチ門・獅子耳に [嵌め

込まれた] 宝石によって光り輝いていた。それはあたかも、世界において他に匹敵するものを見出せなかったので、[都城が] 自分の家々とたがいに [美を] 競い合っているかのようであった。

[1.2.5] 太陽はその [都城] において、蓮の花を [美しさで] 凌駕する美女たちの月のような顔が近づいたにもかかわらず、無視して [通りすぎてしまったので]、[後悔の] 熱悩に駆られ、[興奮を冷ますため] 水に入ろうとするかのようになり、西の海に向かって赴いた。

[1.2.6] 『人びとはこの月 [の美しい姿] を、シャーキャ族が得た名声を表現するための比喻として用いている』と、その [都城] は考えて、旗布が優美に揺れ動く [夜空に立てられた] 旗によって、その [月] にある [表面の黒い] 斑点をぬぐい去ろうと骨折っているかのようであった。

[1.2.7] その [都城] は夜には、銀 [に輝く] 宮殿にある [反射した] 月の [銀色の] 光によって、夜咲き睡蓮のように [美しい] 笑いを見せた。昼には、金 [に輝く] 宮殿にある [反射した] 太陽の [金色の] 光によって、昼咲き睡蓮のような輝きを、身にまとっていた。

[1.2.8] 諸王 [が額づく] 頂きにおいて灌頂したシュッドーダナ (浄飯) という日種の王は、あらゆる都城の王であるその [都城] (カピラヴァストゥ) を飾ったのだった。開花した白蓮が池という場所を [飾る] ように。

[1.2.9] [彼は] 諸王の最高者であっても、また [誰とも同じ立場に立つ] 友人であり<裏の意味：山々の最高者であっても、また翼をもち>、——布施に励んでも、傲慢に陥ることなく<裏の意味：交尾期にあっても、発情液がなく>、——支配者であっても、常に公平な眼を [人びとに] 向けており<裏の意味：[三眼の] シヴァ神であっても常に偶数の眼を向けており>、——温和さを生まれながらの性格として持っているけれども、大きな威厳をそなえていた<裏の意味：[冷涼な] 月の性質を

もっているけれども、激しい [太陽の] 熱さをそなえていた>。

[1.2.10] 戦場において、彼の腕によって強打されて、敵軍の巨象たちがたくさんの真珠を吐きだして^(註5)頭から倒れるさまは、まるで [人が] 信仰によって [神の前に] 花々を捧げつつ、頭を地につけて礼拝するかのようであった。

[1.2.11] [彼は] 烈しい光をもつもの (太陽) が大きな暗黒を [駆逐する] ように、極めて光輝ある威厳によって敵を駆逐し、[迷う人びとに] たのみとすべき [正しい] 道を示しつつ、あらゆるところで人びとを照らし出した。

[1.2.12] 彼の政治的指導によって、[人生の三目的すなわち] ダルマ (宗教的義務) とアルタ (財) とカーマ (性愛) は、お互いに他が有する領域を侵すことがなかった。しかしすばらしい達成をめざして [他と] 競争するかのようであることで、それらは各自の領域で、よりいっそう輝かしくなった^(註6)。

[1.2.13] 決して変化を被ることのない輝きをもつ星々を従えて月が [いっそう輝く] ように、気高い思慮をもつ無数の大臣たちを従えて最高位にある王は、最高の存在として、いっそう強く輝いた。

[1.2.14] 彼にはマーヤーという、あらゆる王妃の中で最高の王妃がおられた。すばらしい美しさから大いなる輝きを発しており、太陽の光のように闇 (翳質) の力を追い払い、迷妄 (マーヤー) を離れたお方であった^(註7)。

[1.2.15] [彼女は] 民衆に対しては、母のように慈善行為に献身し、長上 (師や夫や父母など) に対しては、敬虔さ [の化身] であるかのように従順であった。王家のなかで女神ラクシュミーのように輝きを放ち、まるで地上における最高の神格 (デーヴァター) のようであった。

[1.2.16] なるほど女たちの行状はつねに暗黒ではあるが、[その暗黒は] 彼

女(マーヤー)を得た時に煌々と輝いたのだった。夜が白く輝く弦月を得る時に、全くの暗黒になることがないのと同じように。

〔1.2.17〕 『[超越的な存在である私を]信じようとしなさいこれらの人びとが、本来の性質が感覚機官を越えている [目に見えない存在である] 私と結びつくことは出来ない』と考えて、ダルマ(宇宙の理法)は、微細な自然のかたちであることを捨てて、[人びとの]目に見えるように [マーヤーという]美しい姿を形造ったかのようにであった。

〔1.2.18〕 その時、最高位の菩薩はトゥシタ天(兜率天)から下生し、三界を輝かせながら、[正しく]憶念を保って彼女の胎に入った。洞窟に [入る] ナンダ龍王のように^(註8)。〔→仏伝素材1〕

〔1.2.19〕 世界の唯一の守り主(菩薩)の守護を行なうために、ローカパーラたち(護世の四天子)が天界よりやって来た。そのため月光はいたるところを照らしているのに、[輝きは]とりわけカイラーサ山ではきわだっていた。〔→仏伝素材2〕

〔1.2.20〕 マーヤーは、稲妻の閃光をもつ彼(菩薩)を胎に孕んで、まるで[雷光を宿した]雨雲の連なりのようにあり、いたるところ布施の雨を降らせて、民衆の貧窮の熱悩を鎮めた。〔→仏伝素材3〕

〔1.2.21〕 夜明けに烈しい光をもつもの(太陽)が雲から出て、[闇を打ち破る光線によって煌めきながら、世界を黄金のようにまばゆいものに変える] ように、かの [菩薩]も母胎から出て、闇を打ち破る光線によって煌めきながら、世界を黄金のようにまばゆいものに変えた。〔→仏伝素材4〕

〔1.2.22〕 彼は神々の首長らに持ちかかえられ、身体から発する光輝によって彼らを明るく染めたが、その美しさは、夕暮れの雲の上にある新月さえ凌駕

するものだった。〔→仏伝素材5〕

〔1.2.23〕 彼が誕生した祝いに、山を髻として頭に戴いた大地は、〔神や人によって地に〕撒かれた花々を装身具としてつけて、震えた。自分の泡を軟膏として〔全身に塗りつけ〕身体を美しくした海は、波という手をふりあげて、踊った。〔→仏伝素材6〕

〔1.2.24〕 花や樹から抽出された芳しい香をもつ風が、人間の身体によって享受されるべきものとして〔快く〕吹いた。天界の美女たち（天女アプサラス）が楽器を奏し、舞い踊りをなす、花で飾られたヴィマーナ（空中浮揚車）によって、天空は輝いた^(註9)。〔→仏伝素材7〕

〔1.2.25〕 それぞれの季節が正しい経過でめぐるようになったため、熱惱（苦しみ）が消えた三界は喜んだ。彼の誕生という宝石によって飾られたシャーキャ族は、ことさらに歓喜した。〔→仏伝素材8〕

〔1.2.26〕 彼らのあらゆる目的が成就されたのを見て、長老たちはシッタールタ（目的が遂げられた者）と彼に名づけた。その〔名前〕と結合した者（菩薩）は、宝石を嵌め込んだ黄金の胸飾りのように、劇しく輝いた。〔→仏伝素材9〕

〔1.2.27〕 『世界の唯一の守り主にこの方はなるだろう』と、そう正しい予言を苦行者の長から受けて、彼は〔世人にその〕価値が知られた如意宝珠のように、人びとの尊敬を集める器のような存在となった。〔→仏伝素材10〕

〔1.2.28〕 民衆のさまざまな願いとともに彼は如意樹のように成長してゆき、自分の財を〔惜しみなく〕分け与えることで、世の人すべてをクベーラ（富の神）そっくりにした（富裕にした）。 7

〔1.2.29〕 学問・技芸によって〔鍛えられて〕美しい、あらゆる善い特徴を

そなえた身体を所有している彼を、青春時代の美は、まるで欲情をいただいた女のように、激しい歓喜をもって、抱擁した。<裏の意味：学問・技芸により[婿選び競争に勝ち]、あらゆる善い特徴をそなえた、瘦せた、美しい妻を娶った彼を、若く青春と美を有する女(妻)は、まるで欲情をいただいた女のように、激しい歓喜をもって、抱擁した。>^(註10)

〔→仏伝素材11〕

〔1.2.30〕 その若者は、正しい法による名声の[輝きの]光線によって、人びとのあらゆる住処を白浄に輝かせ、[その名声は]死すべき者(人間)や不死なる者(神々)の英雄たちが得た名声をはるかに凌駕した。太陽[の輝き]が星々を[はるかに凌駕するように]。

〔1.2.31〕 その時シャーキャ族の王(父王)は『真理だけに心を定めたこの[息子]が森に行ってしまうことがないように』と懸念して、カーマ神という王(マーラ)に勝利をもたらすであろう美女たちを、彼にかしずかせた^(註11)。〔→仏伝素材12〕

〔1.2.32〕 彼の美女たちの顔に打ち勝とうと欲するかのようには、月は自らの美しさを[上弦において]徐々に大きく、満ちたものにしていったが、[満月となっても女たちの顔に]対抗できなかつたので、とても恥じ入った白い月は[下弦において]再びやせ細りはじめた。

〔1.2.33〕 きっと創造神は、他の女たちを[造ることの]反復実習によって、巧みさと手法を高めたので、[その熟練の成果として]魅惑的な四肢の美しさを持ち、天女たちも切望するほどの美貌をもつ、かの女たちを造ったにちがいない。

〔1.2.34〕 王の娯楽をもつ者として、その女たちが与える艶めかしいさまざま嬌態による誘惑の遊戯を有しても、彼(菩薩)は老いや病や死に打ち負かされた人間たち[の姿]を見たために、家住期にあっても、性の快樂の行為にむ

かうことはなかった。〔→仏伝素材13〕

〔第1章における〕、『王子が現われる』という、第2節〔おわる〕。

第1章第3節 仏陀たることに達する

〔1.3.1〕 苦からの出離をもとめる方（菩薩）は神々の王たちに励まされながら、王位を捨てて、最も高貴な象のように森を飾った。〔→仏伝素材14〕

〔1.3.2〕 〔彼は〕そこで髪を剃り落とし、〔一人の〕神に与えられた赤みがあった衣（袈裟衣）で身を包んだが、〔そのさまは〕夜明けに雲に取り巻かれた太陽がもつ最高の美しさを凌駕した。〔→仏伝素材15〕

〔1.3.3〕 幾人かの他の師に仕えて学んだが、彼らの教えから満足は得られなかった。なぜなら太陽は〔地平から〕昇ることを、螢から教えてもらうわけではない。〔→仏伝素材16〕

〔1.3.4〕 『大いなる悟り』という名の、偉大な聖者たちの王都に到達し、『忍辱』という名の剣をもって、マーラ（魔）という敵に勝利した。〔→仏伝素材17〕

〔1.3.5〕 その時神々やアスラたちにとっては手の届かない、偉大な『不死の甘露』（涅槃）を抽出するために、〔高い〕智慧という『山の王』を用いて、知の対象（知識）という『海』を攪拌した^(註12)。

〔1.3.6〕 まことに〔彼は〕捨てるべき両方の〔見解〕を捨てて、取るべきものを取り、修習してあらゆる『罪過』という敵に打ち勝ち、すべての中の最上の境地を得た。〔→仏伝素材18〕

〔1.3.7〕 その時、彼の勝利の報せであるかのように、身体の光明が発せられ^(註13)、全世界を照らして、それを悦びに充ちたものに変えた。〔→仏伝素材19〕

〔1.3.8〕 その〔光明〕によって、まるで化粧を施したかのような〔美しい姿となった〕大地は、大きな祭りを催そうとして、自分の熱狂に追従させ、山々を踊らせた。〔→仏伝素材20〕

〔1.3.9〕 海は、うねる波でできた手で〔海底の〕宝石を贈物のようにささげ持ち、泡の笑いをはじけさせながら、彼（仏陀）に敬意をこめた挨拶をしようと立ち上がった。〔→仏伝素材21〕

〔1.3.10〕 天空は、あちらこちらで天の住人（神々）の優美な踊りが披露され、美しい歌声に満ち、〔まるで〕一つの演芸場の舞台であった。〔→仏伝素材22〕

〔1.3.11〕 住居（アーラヤ、世俗的執着）に喜びをもつ世の人々を、〔仏は成道後の〕ある期間、〔説法を躊躇するかのよう〕傍観していた^(註14)。〔作者の感想：〕なぜなら、恵みの雲は、時機を得てから甘露を雨降らして、人々に益をもたらすものであるから。〔→仏伝素材23〕

〔1.3.12〕 〔仏は〕ブラフマー神（梵天）の勧請によって、地上で法輪を転じた。〔作者の感想：〕最高の者に切願された時に、幸いにも、偉大な者たちは雅量のある行いを実行して下さるものだ。〔→仏伝素材24〕

〔1.3.13〕 勝利者（仏陀）という太陽の、言葉という光線を得た時、大きな夜の闇を脱した五人の比丘たちは、神々とともに、吉祥なる教えを証悟した。〔→仏伝素材25〕

〔1.3.14〕 大地に属するヤクシャたちによって報じられたその報せは、まるで矢も楯もたまらぬ性急さで、神々の〔階層の〕階段の連なりに沿って、アカニシュタ天（有頂天）の果てまで昇った。〔→仏伝素材26〕

[1.3.15] この『教法の祝祭』が開始されると、揺れ動く泡の [模様の] 乳房(波)をもつ、海という衣装をまとった大地は、神々の太鼓の音に [合わせて] 踊った。〔→仏伝素材27〕

[1.3.16] まるで一切の生類にこの奇蹟を示そうとするかのように、善逝(仏陀) [が発した] 輝きは、世界と世界の間処においても、闇を追い払った。〔→仏伝素材28〕

[1.3.17] [仏は] カーシャパ [三兄弟] たちを、その弟子たちとともに、正法に気づかせた。[新たに加わった] 彼らに囲まれた [仏は] いっそうすばらしく輝いた。星々をともなった月のように^(註15)。〔→仏伝素材29〕

[1.3.18] それから後に、[仏は] ビンビサーラ王に諸真理を教示した。[作者の感想:] なぜなら、最もすぐれた人たちが歩んだ道へ、ほかの人たちも入るものであるから。〔→仏伝素材30〕

[1.3.19] シャーラドゥヴァティー・プトラ (舎利弗) とコーリタ (目連) を弟子になるように導いて、勝者(仏陀) はいっそうすばらしく輝いた。太陽と月が [メール山のまわりを] 右旋する時に、メール山がいっそう強く輝くように。〔→仏伝素材31〕

[第1章における]、『仏陀たることに達する』という、第3節 [おわる]。

第二部 正量部の仏伝の研究

MSK の第1章第2節と第3節の内容は仏伝である。作者 Sarvarakṣita は第1章第2節以下の仏伝部分の執筆にあたって、そのおおまかな構想は馬鳴の Saundarananda の第1～第3章の仏伝から着想を得たようである^(註16)。第1章第2節をカピラヴァストゥの叙述から語り始め、その後シュッドーダナ王、マー

ヤー夫人と話を進めてゆくのは明らかに Saundarananda 第1章と第2章の影響であろう。マーヤー夫人を語る 1.2.14 詩節は Saundarananda II 49 に類似する：

MSK 1.2.14	Saundarananda II 49
tasyātiśobhāvisṛtātiśobhā	tasya devī nrdevasya
raviṣprabhā vāstatamaḥprabhāvā /	māyā nāma tadābhavat /
samagradevīnivahāgradevī	vītakrodhatamomāyā
babhūva māyāpagataiva māyā //	māyeva divi devatā //

この二つの詩の比較からわかるように、Sarvarakṣita の語り方は馬鳴よりも遙かに洗練されている。1.2.14 詩節は同音を重ねる yamaka の技法(上記テキストの太字の箇所)を見事に用いている。インド梵文学美文体芸術詩の爛熟期の諸作品を知る Sarvarakṣita は馬鳴が用いた詩的技巧よりも高度な技巧を用いて韻文を作った。彼が作詩において影響を受けたことを示す文学作品として、馬鳴の諸作品のほかに Kālidāsa 作の Raghuvamśa があり、Raghuvamśa XVII 57 に MSK 1.2.12 は類似する。Sarvarakṣita は Subandhu 作 Vāsavadattā への註釈も書いており、彼が詩人として影響を受けた作品を本格的に探せばもっと見つかるであろう。

さて詩人にしてまた文法学者、そして正量部の比丘である Sarvarakṣita は第2節と第3節において、思いつくままに仏伝を語ったわけではなく、本論文が以下に示すように、彼の仏伝の語りの背後には何らかの仏伝資料が源泉としてあった可能性が高い。彼の所属部派から考えて、彼の基づいた仏伝資料は正量部の伝承に属するものであったと考えるのが妥当であろう。正量部がいかなる仏伝を有していたのかは全く知られていない。この MSK の仏伝部分だけが現存する唯一の資料となるため、貴重である。

以下において、MSK の第1章第2節と第3節に見られる仏伝素材のそれぞれについて、現存する仏伝資料と比較し、その伝承の位置を探ってゆきたい。その素材分析の作業を通して、MSK の背後にある資料、正量部の仏伝伝承とは

どういふものであったかを考察してみたい。

MSK の仏伝の素材分析

[1.2.18] 仏伝素材 1：菩薩はトゥシタ天から転生して、世界を光明で照らしながら、正念を保ったまま自覚してマーヤー夫人の胎に入った。——〔素材分析：〕この仏伝素材は、古くは阿含・ニカーヤ聖典の記述に基づいている。正念を保ったまま入胎したこと、ならびに全世界が閃光に照らされたことについて、Mahāpadānasutta に次の文がある：「さて、比丘らよ、ヴィッパシン菩薩はトゥシタ天から下生して、はっきりと自覚し、明瞭な意識を保った状態で、母の胎内に入った。これがこの場合の常法である。比丘らよ、これは常法なのであるが、菩薩がトゥシタ天から下生して母の胎内に入るその時には、神々のいる、魔のいる、ブラフマーのいる世界において、沙門とバラモンをふくむ、神々と人とをふくむすべての生きとし生けるものの上に、神たちがもつ神のちからを凌駕して、限りなく巨大な閃光が現れる。空っぽの空間であり、〔上下の方向が〕 盪われていない、暗黒なる、暗黒の暗さをもつ世界間のすきまの地帯（地獄）において——そこではあれほど大威力ありあれほど大威神力あるこの日月すらも輝きをもって照らすことができないのであるが——そこにおいてすら、神たちがもつ神のちからを凌駕して、限りなく巨大な閃光が現れる」（MN, II, p. 12）。以下、パーリの Mahāpadānasutta と梵蔵漢のその並行文献をまとめて、〈大本経関係〉と呼ぶことにする^(註17)。MSK の仏伝素材の 1～7 は密接にこの〈大本経関係〉の仏伝の記事と関係している。〈大本経関係〉の他の並行文献を見ると、有部の Mahāvadānasūtra (FUKITA p. 52; WALDSCHMIDT 4a) では^(註18)、全世界を光明で照らしたことが記されており、正念を保って入胎したという表現が無い。このことは七佛経も同様である (T I, 152b)。ところが大本経では、パーリ文のように、光明による世界遍照の記事の前に、正念を保ちつつの入胎の記事が付いている：「從兜率天降神母胎。從右脇入正念不乱」（T I, 3c15-16）。この点で、仏伝素材 1 に関して Sarvarakṣita が用いた源泉資料の伝承はパーリ上座部の Mahāpadānasutta と法蔵部の大本経に近く、七佛経と有部の Mahāvadānasūtra とは遠いものであった可能性がある^(註19)。しかし資料を〈大本経関係〉から後代の発達仏伝まで広げるならば、正念正知にして入胎したという記事は、超部派的な伝承であると見なしてよいほど、よく見られる。

[1.2.19] 仏伝素材 2：菩薩とその母を守るために、ローカパーラたち（護世の神々）が地

上において守護にあたった。——〔素材分析：〕この仏伝素材も、古くは〈大本経関係〉の阿含諸経にまで遡る。Mahāpadānasutta に次の文がある：「比丘らよ、これは常法なのであるが、求道者が母の胎内に入ったその時には、四人の天子たちがかれの四方を護るためにやって来る、『人間にせよ、人間ならざるものにせよ、あるいは〔その他の〕いかなる存在も、かの求道者と求道者の母をけっして悩害することのないようにせよ』と。これがこの場合の常法である」(DN, II, p. 12)。この四天子守護の記事は、〈大本経関係〉の他の並行文献である Mahāpadānasūtra (FUKITA p. 54; WALDSCHMIDT 4b) や大本経や七佛経にもあるので、諸部派が共有する伝承と見なしうる。

[1.2.20] 仏伝素材 3：菩薩は母胎の中にありながら、母の体を通して、雷光のように輝いて見えた。母は貧しい民衆の苦悩を軽減するために布施に励んだ。——〔素材分析：〕MSK のこの詩節と発想的に関係があると思われる記事が Mahāpadānasutta にあるが、それによれば、菩薩の母は自分の体を透視して、母胎の中で菩薩が光っているのが見えたという：「菩薩の母は、五体満足で欠損のない感官をもっている菩薩を胎中に〔明瞭に〕見る。たとえば、比丘らよ、ラピスラズリの宝石が美しく、格が高く、八面をもち、よく細工され、透きとおり、浄らかに輝き、すべての点で良い品質をそなえていたとしよう。そこに青・黄・赤・白・橙の色の糸が通されている。視力ある人はその様子を手にとって子細に眺めるであろう。『まさしくこの宝石、ラピスラズリは美しく、格が高く、八面をもち、よく細工され、透きとおり、浄らかに輝き、すべての点で良い品質をそなえている。そこに青・黄・赤・白・橙の色のこの糸が通されている』と。比丘らよ、まさしくそのように、菩薩が母の胎内に入ったその時には、菩薩の母にはいかなる病気も生じない。菩薩の母は幸福感をもち、体に疲労を感じない。そして菩薩の母は、五体満足で欠損のない感官をもっている菩薩を〔まるで〕胎の外に出た〔かのよように〕見る」(DN, II, pp. 13-14)。〈大本経関係〉の他の並行文献を見ると、有部の Mahāpadānasūtra (FUKITA, p. 58; WALDSCHMIDT 4d) や法蔵部の大本経もほぼ同じ内容を説く。しかし並行文献の中で MSK のこの詩節の内容に最も近いと思われるのは次の七佛経の伝承である：「彼菩薩摩訶薩從兜率天下降閻浮處母胎時、其身清淨光明照耀、如摩尼珠。母心安隱無諸熱惱。」(T I, 152c25-26)。ここには「光明照耀」という強い表現があるし、「無諸熱惱」という言葉も MSK の作者にインスピレーションを与えた可能性がある。七佛経にはまたその散文に対して独自の偈が付加されているのであるが、その偈は「菩薩處胎時 清淨無瑕穢

猶如琉璃珠 亦如摩尼寶 光明照世間 如日出雲翳 成就第一義 出生最上智 令母無憂惱
恒行衆善業 有情皆歸仰 安處刹帝利」と説く (T I, 152c28-153a4)。特にこの文の太字の箇所は Sarvarakṣita の本詩節の内容を思わせるものである。このような点を見るとき、七佛経が最も近い伝承であるといえる。

〔1.2.21〕 仏伝素材 4：菩薩が母胎から出た時、彼は世界を照らす光明を放った。——〔素材分析：〕これも古くは〈大本経関係〉の記述に遡ることが出来る。Mahāpadānasutta には次のように説かれる：「比丘らよ、これは常法なのであるが、菩薩が母胎から出る時には、そのとき神々のいる、魔のいる、ブラフマーのいる世界において、沙門とバラモンをふくむ、神々と人とをふくむすべての生きとし生けるものの上に、神たちがもつ神のちからを凌駕して、限りなく巨大な閃光が現れる」(DN, II, p. 15)。この誕生時の閃光の記事は、〈大本経関係〉の他の並行文献、Mahāvadānasūtra (FUKITA p. 62; WALDSCHMIDT 5a) や大本経や七佛経でも同様であり、部派間にこの定型的な大光明の伝承に関して内容的な相違はない。

〔1.2.22〕 仏伝素材 5：菩薩が生まれ落ちる時、神々の首長たちが彼を持ちかかえた。生まれた彼の身体は光輝いていた。——〔素材分析：〕この仏伝素材も〈大本経関係〉に遡りうる。神々の首長たちにより (sura-pradhānaih) 菩薩が持ちかかえられた、という点について Mahāpadānasutta には次の記述がある：「比丘らよ、これは常法なのであるが、菩薩が母胎から出られる時には、初めに神々が受けとめ、その後に人間が [受けとめる]。これがこの場合の常法である。[次に] 比丘らよ、これは常法なのであるが、菩薩が母胎から出られる時には、菩薩は地に着かない。彼を四人の天子 (cattāro devaputtā) が受けとめ、母の前に置く。『王妃さま、お喜びください。あなたの生まれた息子は偉大な方です』と」(DN, II, pp. 14-15)。この誕生時の四天子による抱持の記事は七佛経 (T I, 153b7) にも有る：「有四大天子、捧童子身」。ただし母を歡喜させたという視点が七佛経の伝承には見られないが、その方が MSK のこの仏伝素材 5 の叙述と合うため、注意に値する。有部の Mahāvadānasūtra (cf. FUKITA p. 62; WALDSCHMIDT 5a) には、四天子による抱持の記事そのものが欠けている。法蔵部の大本経でも同様に欠けている (cf. T I, 4b-c)。しかし有部の中阿含未曾有法経は「我聞。世尊初生之時、有四大天子。手執極細衣、住於母前、令母歡喜、歎、『此童子甚奇甚特。有大如意足、有大威徳。有大福祐、有大威神』」(T I, 470b22-25) と説くので、有部は少なくとも一系統で

はこの記事を伝えていたことがわかる。四天子が手に極細衣を執って母を歓喜せしめたとする上の記事は菩薩の抱持を暗に示しているが、直接的な表現ではない。以上が〈大本経関係〉の記述であるが、もしこれらの〈大本経関係〉の阿含経に資料を限るならば、Sarvarakṣita が用いたソースは Mahāpadānasutta や七佛経に近いといえるかもしれない。しかし資料をもっと発達仏伝まで広げるならば、この神々による菩薩抱持の記事は、超部派的に普及した伝承であると見なしうる。発達仏伝である異出菩薩本起経は、「四天王即來下作禮、抱持太子、置黄金机上」(T III, 618a20) と説く。また一部の発達仏伝では四天子ではなくインドラ神等が菩薩抱持の役割を担う。例えば Lal ではインドラ神と梵天が菩薩を抱持したと説くし(外蘭 (1994)、pp. 822, 830)、また SBhV (ed. GNOLI, I, p. 44) にも、インドラ神が老いた産婆の姿に変身して、マヤーの前にひかえ、生まれ落ちた彼を鹿皮の衣で受けとめたという記事がある。修行本起経にも「釋梵摩持、天衣裹之」(T III, 463c19) とある。MSK のいう「神々の首長たち」がインドラ神たち、という意味ならば、これらの伝承の方が近いことになる。

[1.2.23] 仏伝素材 6 : 菩薩の誕生事の一つの瑞相として、大きな地震が起こった。——[素材分析:] この仏伝も、阿含・ニカーヤ聖典に基づいている。Mahāpadānasutta に次のように説かれる: 「比丘らよ、これは常法なのであるが、菩薩が母胎から出る時には (中略) この一万世界は振動し、強く振動し、激しく振動する」(DN, II, p. 15)。この大地震の記事は、大光明の記事とペアになって、〈大本経関係〉の他の並行文献、Mahāvadānasūtra (FUKITA p. 62; WALDSCHMIDT 5a) や大本経や七佛経にもあり、また部派不明の仏伝である異出菩薩本起経 (T III, 618a23) や修行本起経 (T III, 463c15-16) にもあって、諸部派が共有する伝承であるといえる。それは超部派的なかたちで文学的な仏伝や大乘の発達仏伝に受け継がれて、Bc (I 21ab) や Lal (外蘭 (1994)、pp. 823, 830) にも見られる。

[1.2.24] 仏伝素材 7 : 菩薩の誕生時に、一つの瑞相として、香風が吹いた。また別の瑞相として、空中では天女たちが楽器を奏でて、舞い踊った。——[素材分析:] この記述も、阿含・ニカーヤ聖典の仏伝素材に遡りうるが、〈大本経関係〉では、なかんずく次の有部の梵文 Mahāvadānasūtra が内容的に近いと思われる: 「[これは]常法なのであるが、ヴィパッシン菩薩が生まれた時、神々は (devatāḥ) 空中から天の青蓮・紅蓮・黄蓮・白蓮を、またアガル香の粉末を、タガラ香の粉末を、白檀の粉末を、天のマンダラカの花を撒いた。天の楽器を

かなでた (divyāni ca vādyāni sampravādayanti)。布を投げ上げた」(FUKITA p. 66; WALDSCHMIDT 5g)。この有部の経の記事は施設論 (T XXVI, 518b3-10, 519a21-b1) や、有部の中阿含・未曾有法経でも確認できる。未曾有法経は「我聞、世尊初生之時、諸天於上鼓天妓樂、天青蓮華紅蓮華、赤蓮華白蓮華、天文陀羅花及細末栴檀香、散世尊上」(T I, 470c11-13) と説く。興味深いことに、パーリ Mahāpadānasutta や長阿含大本経や七佛経には、それにあたる記事が無い。この点で、Sarvarakṣita が用いたソースが古い聖典的資料であるとすれば、上記の有部の伝承に最も近いものだった可能性がある。しかしパーリ上座部でも後の発達仏伝の時代の注釈書 Nidānakathā (Jātaka, I, p. 51) では、菩薩の誕生時の奇蹟の一つとして、「いたるところに花の雨が降り、空中では天上の楽器が奏でられた。一万の世界全体が(中略)、花の好香があまねく薫るこのうえなく美しいものとなった」(藤田宏達訳(1985), p. 59) と説くし、また Lal にも似た記述があり(外菌(1994), pp. 823-824)、また部派不明の修行本起経も「天雨花香、彈琴鼓樂」(T III, 463c19)、また「十一、天爲四面細雨澤香。(中略)二十七、天樂皆下同時俱作」(T III, 464a10-22、なお太子瑞応本起経 T III, 473c は同文を借用)と瑞相を説くので、これは有部だけの伝承と見なすわけにはゆかない。もし資料を発達仏伝にまで広げれば、どの部派に近いと単純に言い切れないといえよう。

[1.2.25] 仏伝素材 8 : 菩薩の誕生事の瑞相の一つとして、季節のめぐりが順調となり、異常気象による飢饉などが無くなった。——[素材分析:] この仏伝に関しては、古い聖典的な仏伝素材に基づいたものか疑わしい。パーリ上座部や有部の伝承、法蔵部の大本経、七佛経など、〈大本経関係〉のどの並行文献にも、この仏伝素材に相当する記述がない。むしろ超部派的な発達仏伝の影響がここにあると見なすべきかもしれない。Lal に菩薩の誕生時ではなく入胎時の瑞相として、「天は適當なる時に雨を降らしめ、風は適當なる時に吹き、季節と星宿とは時宜を得て轉移せり」とある(外菌(1994), p. 804)。

[1.2.26] 仏伝素材 9 : 菩薩の誕生時に人々が望むあらゆる目的が成就されたため、命名式において、シッダールタ ([すべての] 目的を遂げた者) と名づけられた。——[素材分析:] このシッダールタ命名の仏伝素材は、〈大本経関係〉を土台にして釈尊の伝記を作り上げる時に、Vipaśyin 仏の命名のエピソードを釈尊の命名のエピソードに替えることで成立したと思われるが、発達仏伝ではそれはほぼ必須の仏伝要素となり、多くの発達仏伝に見られる(Bc

II17; SBhV, ed. GNOLI, I, p. 47; Lal, ed. LEFMANN, pp. 95-96; Mvu, ed. SENART, II, p. 26 など)。ただし Bc を含めて有部系統の仏伝は、名を Sarvārthasiddha とする特別な伝統を持っているが、MSK のソースは有部系と違うため、Siddhārtha とするのであろう。

〔1.2.27〕 仏伝素材10：菩薩は誕生の直後に王宮を訪れたアシタ仙によって、将来仏陀になると予言を受けた。——〔素材分析：〕 この仏伝素材はすでに最も古い経典 Suttanipāta (PTS ed., pp. 131-139) に記述があり、部派分裂以前に普及していたものである。部派間に伝承の実質的な相違はない。

〔1.2.29〕 仏伝素材11：菩薩は美しく成長し、妻を娶った。——〔素材分析：〕 1.2.29 詩節には表の意味と裏の意味があるが、妻を娶ったことが裏の意味から理解される。妻を娶ったという仏伝素材は多くの発達仏伝の文献にあるが、古い経典には全く記述がない。妻に関する伝承自体が阿含・ニカーヤの時代以後に属する。そのため、彼の妻の名前は諸部派によって異なって伝持されたようである。しかし MSK はここでその妻の名を記さないため、部派的な伝承の固有性を割り出すことができない。

〔1.2.31〕 仏伝素材12：父王は、菩薩が出家することを畏れ、それを阻止するために、美女たちをかしずかせた。——〔素材分析：〕 この仏伝素材も、多少発達した仏伝であればどの文献でも見られるものである。五分律受戒法の未発達な仏伝にすでに「菩薩少有出家志。父王恐其學道。常以五欲而娛樂之」(T XXII, 101b20-21) と萌芽的な記事があり、四門出遊とつながりをもつ。後の発達仏伝には父王の配慮の詳細が語られるようになる。例えば過去現在因果経にも「爾時白淨王、既聞仙人決定之説、心懷愁惱、慮恐出家。(中略)又復別爲起三時殿。温涼寒暑、各自異處。其殿皆以七寶莊嚴。衣裳服飾、皆悉隨時。王恐太子棄家學道。使其城門開閉之聲聞四十里。又復擇取五百妓女。形容端正、不肥不瘦、不長不短、不白不黒。才能巧妙、各兼數技、皆以名寶、瓔珞其身。百人一番、迭代宿衛」(T III, 627c4-14) とある。Bc II25-32 の記述では、菩薩に女たちをかしずかせる父王の行動の一環として、後宮の女たちのお仕への他にヤショーグラの結婚も語られる。

〔1.2.34〕 仏伝素材13：菩薩は外出時に老人・病人・死者の姿を初めて見たために、人間の

あり方に幻滅し、そのため王宮の女たちにかしづかれながらも、女という愛欲の対象に心を向けることがなかった。——〔素材分析：〕四門出遊の仏伝素材は〈大本経関係〉が仏伝的文献としての初出となる。このMSKの詩節の、(a)出遊時の幻滅→(b)女たちを遠ざけて、性の快樂の行為をしない、と(a)(b)二つを直接的な因果関係でつなぐ語り方に注意したい。パーリMahāpadānasuttaは、菩薩が物思いに沈んでいることを知った父王が、予言により菩薩の出家を怖れて、五感覚の悦樂 (pañca kāmagaṇāni) を賦与したと記すのみである。女という表現ではない。それは四門出遊と因果関係がなく、四門出遊の前に置かれている。〈大本経関係〉の他の資料を見ると、毘婆尸佛経では(T I, 154b-155b)、「宮内に於て種種上妙五欲を施設し太子を娛樂せしむ」という父王の対処が、四門出遊の事件の結果として描かれる点で、パーリ伝承よりも発達仏伝に近づいてくる。しかし毘婆尸佛経は五欲妙樂あるいは種種上妙五欲という表現を用いて、まだ女という言葉を使わない。法蔵部の大本経(T I, 6b-c)で、具体的に女という言葉が出てくる。四門出遊の結果として父王は菩薩のため「宮館を嚴飾し、采女を簡擇して以て之を娛樂せしむ」と大本経は説く。ここから女たちの菩薩への誘惑という後代に普及した仏伝モチーフが生じてくるわけである。しかし女たちに対して菩薩がどういう反応をしたのかを、これらの〈大本経関係〉の阿含・ニカーヤ文献はまだ説かない。その後の時代の発達仏伝になって、王がさしむけた女たちに対して菩薩がどう無関心であったのかを語るようになる。特にBc第4章では、それが詳しく物語られる。この点を考えると、MSKの「性の快樂の行為 (rati-vidhim) にむかうことはなかった」という表現は、やや新しい発達仏伝の要素を取り入れているように思われる。

[1.3.1] 仏伝素材14：神々の王たちに励まされながら、菩薩は出家した。——〔素材分析：〕「励まされながら」と訳した原文は codyamānaḥ であり、「勸言・勸発・勸請されながら」という意味である。出家を促すために神々が来訪し、菩薩に出家を勧めたというエピソードは仏伝にとって必須の要素ではなく、出家という事件を宇宙的規模にするために、後から仏伝に付け加わった要素と見なすことができる。しかし発達仏伝においてこのエピソードを説くものは多く、説かないものは少ない^(#20)。それを説く発達仏伝において、いかなる神が励ましたかについて着目すると、伝承にさまざまな異説があることがわかる。まず過去現在因果経は、淨居天王及欲界諸天が勧めたとする：「淨居天王及欲界諸天、充滿虛空、即共同聲、白太子言。内外眷屬、皆悉憎臥。今者正是出家之時。爾時太子即便自往至車匿所」(T III, 632c28-633a1)。

Mvu の第二出家経では、出家を勧めるためにまず淨居天たちが (śuddhāvāsā devā)、次に自在天子が (īśvaro devaputro)、次に大自在天が (maheśvaro)、次に大梵天が (mahābrahmā) 現われて勧発の偈を述べたとする (ed. SENART, II, 158)。異出菩薩本起経は四天王が勧めたとする：「夜半時、四天王、從天窓中來、呼太子曰。時到可去。太子曰。我欲去不能得去」(T III, 619a29-b1)。また破僧事は大梵天とインドラ神等が勧めたとする：「爾時菩薩發心欲出。大梵天王及帝釋等、知菩薩念。應時而至、合掌恭敬、而說頌曰」(T XXIV, 115c22-23; SBhV ed. GNOLI, I, p. 84)。衆許摩訶帝経も同様に「爾時帝釋天主及梵天王告太子言。善哉善哉、速捨五欲、早出宮殿。明相現前、證一切智」(T III, 946a16-17) と説く。また修行本起経や太子瑞応本起経は「天」と記するだけなので、それがいかなる神であるかは不明である^(註21)。また Lal を見ると第13章 Saṃcodanā-parivarta (勧発の章) では無数の神々たちが菩薩のもとを訪れ、「いつ我々は菩薩の出家を見ることができなのか」と願いつつ黙って神々が見守る中で、不思議にも歌詠と樂器の音響の中に、彼の出家を勧発する言葉が自然に出現したことが説かれる。そしてその章の終りで、フリーデーヴァ (Hrīdeva) と名づける神が320万の神々に圍繞されて菩薩を来訪し、菩薩に対して直接的に、出家を勧める言葉を韻文で語る。——以上のように、發達仏伝においては出家を勧めた神の名に関して実に様々な伝承があることがわかるが、MSK が語る「神々の王たち」(surādhipaiḥ) をごく一般的に「インドラ神たち」という意味に理解するならば、大梵天とインドラ神が菩薩に出家を勧めた、という上記の有部系仏伝 (破僧事、衆許摩訶帝経) の伝承が MSK のこの箇所^(註21)の伝承に最も近いように思われる。

[1.3.2] 仏伝素材15：菩薩は家を出た後に自ら剃髪し、また王子の服は修行に適さないため、神が黄褐色の修行者の衣 (袈裟衣) を献じた。——〔素材分析：〕この仏伝素材は發達仏伝としてごくありふれたもので、特に伝承の部派的な固有性を見出すことはできない。神の名が記していないのが残念である。Nidānakathā によれば袈裟衣などを持ってきて献じたのは前世で菩薩の親友であったガティーカーラ大梵天である。Bc (VI 60) によれば一人の神が袈裟衣を着た鹿狩りの狩人の姿になって近づいてきて、菩薩と衣服を交換した。

[1.3.3] 仏伝素材16：菩薩は出家後、幾人かの師から教えを受けたが、彼らの教えに満足できずに、去った。——〔素材分析：〕悟りを得る前に菩薩が二人の師、アーラーマ・カーラーマ (P. Ālāma Kālāma; Skt. Ārāḍa Kārāma) とウツダカ・ラーマプッタ (P. Uddaka

Rāmaputta; Skt. Udraka Rāmaputra)のもとで教えを受け、二種の三昧を学んだという仏伝の記述は阿含・ニカーヤ文献 (MN 26, Ariyaparyesanasutta, etc.) に由来する極めて古い仏伝素材である。ただしこの詩節の原文の「師」という言葉 gurūn は両数ではなく複数であるから、上記の二人の師だけを意味しているのではないように思われる。もし菩薩が出家直後に苦行林で苦行も学んだこと (Bc 第7章や仏本行集経の観諸異道品など) も含意されて複数形になっているとすれば、そこに発達仏伝の影響を指摘することができる。

[1.3.4] 仏伝素材17: 菩薩は『忍辱』という武器により魔軍を打ち破って、偉大な悟りに達した。——〔素材分析:〕菩薩が魔軍を打ち破ることが出来たのは、寛容・忍耐 (kṣānti) の力によるものであった、という見方は何らかの聖典的伝承に基づいていると思われる。破僧事によれば、襲いかかる魔軍が菩薩にむかって様々な武器を投げつけた時、菩薩は『慈しみ』の定に入った (maitrīm samāpannah)。すると、魔軍の武器は変じて蓮華になって落ちたという (SBhV, ed. GNOLI, I, p. 115)。そして破僧事はそのことを「マールを『慈しみ』の武器をもって打ち負かして」(māraṃ maitreṇāstreṇābhinirjitya)と文学的に表現している (ed. GNOLI, I, p. 119, ll. 8-9; p. 120, ll. 22-23)。また修行本起経も、菩薩が慈心をもって魔軍に応じたことを説く: 「菩薩慈心、不驚不怖、一毛不動、光顔益好。鬼兵不能得近」(T III, 471a12-13)、「吾以不復用兵器 等行慈心却魔怨」(471b12)。そして注目すべきことに、この修行本起経には「忍力降魔」という言葉がある: 「菩薩累劫清淨之行。至儒大慈、道定自然。忍力降魔、鬼兵退散」(T III, 471b23)。修行本起経のこれらの文はそのまま逐字的に太子瑞応本起経に借用されている (T III, 477b-488a)。このように Sarvarakṣita が用いたソースにも、『忍辱』の心によって魔を打ち破ったという伝承があったのであろう。

[1.3.6] 仏伝素材18: 菩薩は苦行主義と快樂主義の両方の極端な見解を捨てて、取るべきもの (中道) をとり、[四諦を見て見道に達し] 次いで修道において修習して煩惱を滅ぼし、最高の境地たる仏となった。——〔素材分析:〕このMSKの記述は、菩薩が悟りを得たプロセスとして、十二因縁の観察や三明を挙げていない。中道だけに触れている点で注目される。中道をとる→真理を見る→修習する→仏となるという四段階がこの詩節で簡潔に表現されているように思われる。パーリ相應部、第12諦相應、第2 転法輪品の第11「如来所説」(tathāgatena vutta) という経は、中道を悟って四諦を得たとする: 「私はこのように聞いた。その時世尊

はバーラーナシーのイシパタナ・ミガダーヤ園に滞在しておられた。その時世尊は五人の修行僧に話しかけられた。比丘たちよ、出家者は二つの極端に近づいてはならない。二つの極端とは何であろうか。愛欲の快樂に耽ることは卑しく、野卑で、凡俗の者がすることで、不浄で、益の無い行為である。また、苦行に励むことも苦痛だけで、不浄で、益の無い行為である。比丘たちよ、如来はこの二つの極端を退けて、中道を覚ったのであり、そのことが眼を開き、智恵を生じ、静寂、証智、正覚、涅槃へ導くのである」(SN, V, pp. 339ff.)。この「如来所説」経のように初転法輪を扱う古い經典の、特に中道を説く記述が、直接的あるいは間接的に、MSKのこの詩節の記述における源泉になっていると思われる。

[1.3.7] 仏伝素材19：成道直後に大光明が発せられ、世界を照らし、衆生を喜ばせた。
——〔素材分析：〕以下、四つの詩節（仏伝素材19～22）で、成道時に世界に起こった出来事が四つ語られるが、1.3.7詩節ではその一番目の瑞相として大光明があったことが語られる。その大光明は、上記の仏伝素材4の解説に記したものと同じで、これは仏教經典で古くから頻繁に使われる定型句である。過去現在因果経（T III, 642b29-c2）や佛本行集経（T III, 795c23-796a1）や破僧事（T XXIV, 124c20-25; SBhV, ed. GNOLI, I, pp. 120-121）も、成道直後の同じ場面で、ほぼ同じ定型句を用いて、大光明を説いている。MSKの作者も定型句で大光明を表現する聖典的記述に基づいて、この詩節を作ったのであろう。その定型句に従えば、その大光明は特に仏の身体から発せられた光ではなく、大地震などと同様に、自然が発したものと見なすべきである。Bc (XIV, 87) でも、「神通を完成せる超人たちに満ちた四方は輝き」と語り^(註22)、成道直後の大光明を表現しているのであるが、仏陀が発した光であるとは記していない。この事に関してMSKの本詩節の pāda b の samudīrṇā tanuprabhā (or samudīrṇātanuprabhā) の読みについて、「身体の光明 (tanu-prabhā) が発せられた」ではなく「大きな光明 (atanu-prabhā) が発せられた」と読むべきかどうか迷う。どちらも韻律的には問題がない。しかし佛本行経は、成道の時に仏の身体から光明が発したとする伝承を有する：「佛身奮放正法光 四維上下遍十方 變現種種諸形像 故先使至遍覺悟」(T IV, 78c29-79a1)。また Mvu も掌から光を発したとする (II, p. 344, l. 16)。確かにこれらは珍しい伝承ではあるが、私はこれらの記事に基づき、「身体の光明 (tanu-prabhā) が発せられた」という読みを取った。

[1.3.8] 仏伝素材20：成道時の瑞相として、大地は震動し、山々は揺れ動いた。——〔素材分析：〕MSKの作者は成道時に大地震があったということを文学的に表現するため、大地が山々を踊らせたと擬人法を用いて言い替えた。なお佛本行経という韻文作品においては成道時の瑞相として「三千世界六變動」(T IV, 78c20) という文のほかに、「須彌喜與諸山禮」(T IV, 78c27) という文があり、山々の擬人法がそこですでに用いられているので、Sarvarakṣitaのオリジナリティではない可能性もある。他の仏伝文献ではその文に相当するものを見出すことが出来ない。

[1.3.9] 仏伝素材21：その時、成道を喜ぶかのように、海は大きく波立った。——〔素材分析：〕この詩節の内容に相当すると思われるものを諸仏伝の中に探すと、佛本行経に「淵海波涌、震妙聲」(T IV, 78c26) と擬人法的に説かれる成道時の瑞相が一つあるだけである。他の仏伝文献にはそれに相当する記述を見出すことが出来ない。それゆえこの佛本行経という韻文の作品の梵文テキストがMSKのこの詩節に関係している可能性もありうる。しかし偶然に、似た詩的表現を同じ場面で用いただけかもしれない。つまりこれは地震を表現するための単に文学的な修辭であって、一つの独立した瑞相と見なすべきではないかもしれない。前の詩節で語った大地震の結果として海が波立ったと表現しただけではないだろうか。

[1.3.10] 仏伝素材22：成道時に、神々は天空で舞い踊り、歌った。——〔素材分析：〕成道時の出来事として、天空で神々が舞い踊り、歌ったことを記す文献はどれもかなり進んだ発達仏伝文献である。過去現在因果経に「是時諸天、作天伎樂散花燒香、歌唄讚歎。執天寶蓋及以幢幡、充塞虛空、供養如來」(T III, 642b19-21) とある。佛本行集経には「又虚空中、一切諸天、作天音樂、作天歌讚、而雨種種無量花雨」(T III, 795a5-6) とある。Mvu (II, p. 344, ll. 3-4) も天の音楽をなし、天の合唱をしたと記す。以上の諸文献には音楽と歌に言及しているが、舞い踊ったことまでを記していない。しかし韻文の佛本行経は「伎樂不鼓自然鳴 諸天鼓樂空中作 天應慶喜世得持 地虚空神普踊躍」(T IV, 78c24-26) と、「踊躍した」ことも記す。この点で佛本行経が最もMSKに表現が近いといえるかもしれない。Lal (ed. LEFMANN, p. 352) には、十方の菩薩たちと天子たちが歓喜の声 (ānandaśabda) を発したとあるが、歌舞したという記述はない。Bc (XIV 91) も神々が歓喜したことを語るが、歌舞は語らない。成道時に神々が歌舞したというこの瑞相について、四分律や五分律、破僧事、衆許摩訶帝経な

ど小乗部派上座部系の古い仏伝には記述がないことから、この瑞相を説くのは、発達仏伝の比較的新しい層に属するものではないかと思われる。

[1.3.11] **仏伝素材23**：成道後のしばしの間、仏は世の人々への説法を躊躇しているかのようであった。——〔素材分析：〕仏陀が説法を躊躇したという伝説は、梵天勧請という有名なエピソードの導入に必要な要素であり、梵天勧請の出来事とセットになっていると見るべきである。この伝道躊躇と梵天勧請という仏伝素材は〈大本経関係〉つまり Mahāpadānasutta またはその相当経にすでにある。部派分裂以前に遡る極めて古い伝承なので、特に部派性を指摘することはできない。

[1.3.12] **仏伝素材24**：梵天の勧請により、初転法輪がなされた。——〔素材分析：〕この仏伝素材は諸部派共通の伝承であり、何ら特殊性（部派的固有性）を見出すことが出来ない。

[1.3.13] **仏伝素材25**：初転法輪時に、五比丘は神々とともに、仏の教えを悟った。——〔素材分析：〕最初の説法で、神々が一緒に真理を悟ったとする点に注意すると、その記述は仏伝では珍しいものではない。中本起経という比較的素朴な感じがする仏伝でも、「世尊説是法時、拘憐等五人、漏盡意解、皆得羅漢。及上諸天八萬、逮得法眼」(T IV, 149a8-9)と、8万の神々が五比丘と一緒に悟ったことを記す。このほか、過去現在因果経(T III, 644c11-13)では五比丘の中で最初の比丘 (Ājñātakauṇḍinya) が悟った時に同時に虚空中の8万ナユタ (8千兆) の神々も悟ったとし、破僧事(T XXIV, 128a10)でも最初のその比丘が悟った時に8万の神々が、佛本行集経(T III, 811c18)でもその時に6万の神々が、Mvu(ed. SENART, III, pp. 333-334)でもその時に18コーティ (1億8千万) の神々が、Nidānakathā (Jātaka I, p. 82) では転法輪経の説法が終った時に18コーティの梵天が、同時に悟ったとする。しかし特に過去現在因果経と MSK との仏伝記述の合致は、以下の MSK の三つの詩節においても連続的に起こるので、その点でその資料に最も注目すべきである。

[1.3.14] **仏伝素材26**：初転法輪がなされて五比丘が悟ったという報せは、地界のヤクシャからただちに天界に昇り、アカニシュタ天まで届いた。——〔素材分析：〕この、初転法輪時の奇蹟の一つとして、地界のヤクシャから発した報せの音が、上へ上へ伝わってブラフマー神

の世界までに至った、という仏伝素材は、四分律 (T XXII, 788b-c)、五分律 (T XXII, 104 c)、SBhV (ed. GNOLI, I, pp.136-137)、Catuspariṣatsūtra (II, p.156)、佛本行経 (T IV, 79 b)、衆許摩訶帝経 (T III, 954b)、Bc (XV 54-56) など多くの小乗上座部系の仏伝文献で確認できる。しかしその神の声が、ブラフマー神の世界ではなく、アカニシュタ天の世界まで昇ったとする点で、このMSKの詩節の伝承は多少の固有性を示している。それはまたソースとなった仏伝の成立の新しさを示すように思われる。声が届いたのをブラフマー神の世界とする伝承の方が古く、それを大袈裟にするかたちで、最高天であるアカニシュタ天の世界とした伝承はもっと新しい時代の伝承であると考えられるからである。声が届いた世界としてアカニシュタ天の名前を出す伝承としてはこのMSKのほか、過去現在因果経 (T III, 644c17)、佛本行集経 (T III, 812a27)、漢訳破僧事 (T XXIV, 128a24) がある。同じ根本有部の破僧事でも、漢訳と梵本がこの点で伝承を異にしているのは興味深い。破僧事のチベット訳ならびに東トルキスタン出土のCatuspariṣatsūtraはこの箇所では梵本破僧事と同文である。義浄の漢訳破僧事の方が新しい伝承を示していると思われる。

[1.3.15] **仏伝素材27**：初転法輪の時、説法を祝う祭が催されたかのように、神々は太鼓を鳴らし、大地と海は震動した。——〔素材分析：〕この仏伝素材の前後もあわせて、仏伝素材26～28をひとまとまりとして見る時に、この仏伝素材に最も伝承が近いのは、過去現在因果経 (III, 644c11-23) であると判断できる。その詳細については下記の第3ブロックの説明の箇所で述べる。

[1.3.16] **仏伝素材28**：初転法輪の時、仏陀が発した輝きは、すべての生類、世界と世界の中間処に生まれた生類たちをも、照らした。——〔素材分析：〕これについては、下記の第3ブロックの説明を参照。

[1.3.17] **仏伝素材29**：その後、仏はカーシャパ三兄弟とその弟子たちを教化して、出家教団に加えた。——〔素材分析：〕仏陀の示した「ウルヴェーラーの神変」を目にしてこのカーシャパ三兄弟が弟子たち千人とともに帰服するという仏伝素材は、諸部派の受戒健度の仏伝に属し、きわめて古いものである。部派分裂以前からある、いわば超部派的な伝承なので、この記事に特に部派の固有性を指摘することは出来ない。

[1.3.18] 仏伝素材30：その後、マガダ国王ビンピサーラを仏は教化した。——〔素材分析：〕この仏伝素材も、古くは受戒捷度の仏伝に属し、諸部派が共有する伝承である。

[1.3.19] 仏伝素材31：その後、舍利弗と目連という双弟子を得た。——〔素材分析：〕この双弟子の入信という仏伝モチーフは〈大本経関係〉にすでにあり、それらの経では Vipaśyin 仏の双弟子の名前が挙げられる。特に舍利弗と目連の入信という仏伝素材は、古くは律蔵受戒捷度の仏伝に属し、諸部派共通の仏伝伝承であった。MSK が語る仏伝が、この舍利弗と目連の仏教への帰依の出来事で終わっており、その前にカーシャパ三兄弟の回心(仏伝素材29)とビンピサーラ王への説法(仏伝素材30)の出来事が置かれていることは、Sarvarakṣita が用いた仏伝ソースが、律蔵受戒捷度の仏伝と同じ枠組をもつものであった、つまり律蔵受戒捷度の仏伝をコアとして出来た発達仏伝であった可能性を、示唆するように思われる。

上記の素材分析から見てとれるもの

以上で MSK の仏伝のそれぞれの素材に対して、最も近い伝承を現存資料のなかに探りながら、Sarvarakṣita の用いた仏伝ソースを考察する作業を行った。その結果、この MSK の仏伝部分と完全に内容的に一致する仏伝文献は梵文・漢訳・蔵訳等で現存していないことが、まず確認できたといえよう。

Sarvarakṣita が作った詩節の各々について並行資料を調べてゆくと、それらの詩節は思いつくまま自由に作られたのではなく、聖典的な知識、何らかの源泉資料に基づいて作られたものに違いないという印象が強くなる。MSK の第2章以下は正量部の宇宙論文献(文献X)を種本にし、それにかかなり忠実に作られているが、それと同じ態度で、この第1章の仏伝部分も作られたのではないだろうか。Sarvarakṣita がもつこの仏伝部分のソースが何かの仏伝作品であったとすると、それが一つだったのか、複数だったのかを考えねばならないが、仮に複数のソースが用いられているとしても、MSK の仏伝で特にいくつかの詩節にわたって内容的に緊密に関係する仏伝素材が連続している場合は、同一のソースから連続してそれらの一連の素材が用いられたと考えてよい。この点を手がかりにして、以下に、仏伝部分の背後にあるソースの考察を試みたい。

緊密に内容的に連続する仏伝素材は一つのブロック（固まり）をなしていると思なしう。MSKの仏伝を全体的に見て、そのような仏伝素材のブロックが三つある。下に示す表は、MSKの仏伝部分（第1章第2～3節）における仏伝素材の一覧である。仏伝素材は全部で31あるが、その中で仏伝素材の1～8（入胎と誕生時の一連の奇蹟）をひとまとめにして第1ブロック、仏伝素材19～22（成道直後の一連の瑞相）を第2ブロック、仏伝素材25～28（初転法輪時の一連の瑞相）を第3ブロックと呼びたい。

- | | | |
|-----------|---------------|-------------------------|
| 1.2.18～25 | 第1ブロック | （仏伝素材1～8 入胎と誕生時の一連の奇蹟） |
| 1.2.26 | 仏伝素材9 | シッダールタ命名 |
| 1.2.27 | 仏伝素材10 | アシタ仙による予言 |
| 1.2.29 | 仏伝素材11 | 成長し、妻を娶る |
| 1.2.31 | 仏伝素材12 | 出家阻止のため父王が美女たちをかしずかせる |
| 1.2.34 | 仏伝素材13 | 老人・病人・死人に会う |
| 1.3.1 | 仏伝素材14 | 神々の王たちに励まされ、出家する |
| 1.3.2 | 仏伝素材15 | 剃髪し、袈裟衣を着ける |
| 1.3.3 | 仏伝素材16 | 幾人かの師のもとで学ぶ |
| 1.3.4 | 仏伝素材17 | 忍辱の剣で魔軍を破る |
| 1.3.6 | 仏伝素材18 | 中道をとり、煩惱を滅ぼし、悟りを得た |
| 1.3.7～10 | 第2ブロック | （仏伝素材19～22 成道直後の一連の瑞相） |
| 1.3.11 | 仏伝素材23 | 伝道の躊躇 |
| 1.3.12 | 仏伝素材24 | 梵天の勧請と初転法輪 |
| 1.3.13～16 | 第3ブロック | （仏伝素材25～28 初転法輪時の一連の瑞相） |
| 1.3.17 | 仏伝素材29 | カーシャパ三兄弟と弟子の帰服 |
| 1.3.18 | 仏伝素材30 | ビンビサーラ王の教化 |
| 1.3.19 | 仏伝素材31 | 舍利弗と目連の入信 |

以上のMSKの仏伝素材の表において、注目に価するのが三つの素材のブロック（内容の連続的なまとまり）である。その三つのブロックでは、奇跡的な出

来事が複数個、並列的に物語られている。これらのブロックの箇所は、作者 Sarvarakṣita が用いた仏伝の伝承の独自性をやや詳しく知ることが出来るために重要である。それぞれのブロックについて、最も近い部派的伝承は何かを調べてみる。

第1ブロック

まず第1ブロック（仏伝素材1～8）で扱われる入胎・誕生時の驚くべき出来事の列挙については、それらの記述の最古の源泉として Mahāpadānasutta に相当する古い阿含・ニカーヤ文献——それらを私は〈大本経関係〉と呼ぶ——にまで仏伝伝承を遡ることが出来る。〈大本経関係〉諸経を含め、この箇所は諸部派の資料に恵まれているので、それらの並行資料の伝承を比較して、部派間の伝承の相違を知ることが出来る。上記の素材分析の結論だけをかき摘んでいえば、第1ブロックの仏伝素材1に関しては、〈大本経関係〉の阿含経に資料を限定するなら、パーリ上座部の Mahāpadānasutta と法蔵部の大本経に、その伝承が近い点があることが指摘しうる。しかし資料の範囲を後代の発達仏伝まで広げるなら、その仏伝素材は超部派的な伝承といってよい。また仏伝素材3に関しては、所属部派不明の七佛経に伝承が近いように思われる。仏伝素材5に関しては、もし資料を〈大本経関係〉に限定すれば、Mahāpadānasutta や七佛経に最も伝承が近いといえるかも知れない。しかし資料を発達仏伝に広げれば、超部派的なものを見なすべきである。仏伝素材7に関しては、資料を〈大本経関係〉に限定すれば、有部の Mahāvadānasūtra に伝承が近いように思われるが、しかし資料を阿含から発達仏伝に広げれば、やはり超部派的なものを見なしうる。MSK の第1ブロックの全部の仏伝素材について、〈大本経関係〉の阿含資料と密接に関係しているらしいことが推測されるが、しかし第1ブロック全体が一貫してどれか一つの部派の聖典伝承に最も近い関係をもつという決定的な結論を得るには至らなかった。たしかにそれぞれの仏伝素材は、〈大本経関係〉の阿含資料に限らず、発達仏伝においても継承されて使われているので、発達仏伝が使われた可能性もある。その発達仏伝的徴候は仏伝素材8に見られる。しかし大乘のLalのような発達仏伝ではなく、この第1ブロックの全

体に関しては、〈大本経関係〉と直結した何らかの小乗発達仏伝、つまり〈大本経関係〉の阿含的伝承をほぼ忠実に内側に組み込んでいるような上座部系の発達仏伝が使われた可能性が高いと考えられる。その仏伝が現存していないために、上記の比較が煮え切らない結論しかもたらさないだけである。

[なお補足的に、この第1ブロックについて記事の一致点ばかりでなく、記事の欠落にも目を向けておくと、最も注意すべきは「菩薩が生まれた時に、七歩行って、諸方を観察した」という記事が MSK に無いことである。MSK は誕生時の奇蹟を Mahāpadānasutta に相当する経に基づいて語っているし、奇蹟を語ることは嫌いではないから、なぜこの、Mahāpadānasutta 等には説かれている有名な記事が欠けているのか、不思議である。この記事の欠落の理由を探ると、パーリ上座部の Mahāpadānasutta ならびに有部や法蔵部のその並行文献はどれもその記事を有しているが、部派不明の阿含経である七佛経だけはその記事を欠いている。このことから、七佛経と MSK はこの点で伝承が一致するのではないかと思われる。私は以前に七佛経は犢子正量部の一系統の阿含ではないかと推測する論文を書いたが、その時にこの点を指摘した^(註23)。第1ブロック全体に使われたソースは正確には七佛経ではないが、七佛経の系統に近い未知の発達仏伝であることはありうると思う。]

第2ブロック

次に第2ブロック(仏伝素材19~22)で扱われる、成道直後の驚くべき出来事の列挙では、三つの奇蹟、すなわち大光明・大地震・神々の歌舞、が説かれる。ただし見方によっては四つの奇蹟、すなわち大光明・大地震・海波・神々の歌舞、がそこに説かれていると見ることもできる。その四つの奇蹟すべてを挙げる仏伝は佛本行経である。また三つの奇蹟を挙げる仏伝は過去現在因果経、佛本行集経、Mvu (ed. SENART, II, p. 344) である。二つの奇蹟(大光明と大地震)を挙げるのは Bc (XIV 87), Lal (ed. LEFMANN, pp. 351-352) や Nidānaka-thā (Jātaka I, pp. 75-76) であり、これら以外の仏伝の並行文献もせいぜい一つ(大光明)か二つ(大光明と大地震)である。このように、第2ブロックに関する限り、過去現在因果経、佛本行経、佛本行集経、Mvu の四つの仏伝が MSK

の伝承に近く、とりわけ佛本行経は最も近いといえる。佛本行経は Bc と同じように韻文の仏伝で、詩人 Sarvarakṣita が好みそうな作品であるから、原文で読んで影響を受けていた可能性がある。佛本行経と過去現在因果経は所属部派がわからないが、共に Bc の影響を受けている仏伝である。

第3ブロック

次に第3ブロック(仏伝素材25~28)で扱われる、初転法輪時の驚くべき出来事の列挙に関しては、それに近い仏伝伝承を探してゆくと、かなり類似する伝承をもつ文献を絞り込むことが出来た。興味深いことに、その初転法輪時に起こった四つの出来事は、過去現在因果経と同じ内容、同じ順序で説かれているのである。MSK の1.3.13~14(仏伝素材25、26)は(1)初転法輪時に神々もそれを聞いて同時に悟ったこと、(2)地神が発した声がアカニシュタ天まで達したことを説くが、過去現在因果経も同様のことを同じ順序で説き、その次も、MSK の1.3.15(仏伝素材27)のように、(3)大地が震動したこと、そして神々が空中で音楽をなし、天鼓が鳴ったことを説き、さらに MSK の次の詩節 1.3.16(仏伝素材28)が語るように、(4)世界に大光明があったと説く。このように、過去現在因果経は初転法輪の時に起こったすべての出来事を、MSKと全く同じ順番で説くのである。この見事な合致は、偶然ではあるまいと思われる。過去現在因果経の文をあげると、次の通りである：「(1) 當佛三轉四諦十二行法輪時、阿若憍陳如、於諸法中、遠塵離垢、得法眼淨。時虛空中、八萬那由他諸天、亦離塵垢、得法眼淨。(2) 爾時地神、見於如來、在其境界、而轉法輪、心大歡喜、高聲唱言。『如來於此、轉妙法輪』。虛空天神、既聞此言、又生踊躍、展轉唱聲、乃至阿迦膩吒天。諸天聞已、欣悅無量、高聲唱言。『如來今日、於婆羅捺國鹿野苑中仙人住處、轉大法輪。一切世間、天人魔梵、沙門婆羅門、所不能轉』。(3) 爾時大地、十八相動。天龍八部、於虛空中、作衆伎樂、天鼓自鳴。燒衆名香、散諸妙花、寶幢幡蓋、歌唄讚歎。(4) 世界之中、自然大明」(T III, 644c11-23)。他の仏伝では、これほどうまく MSK の記述と合致しない。佛本行集経(T III, 811c-812b)を見ると、さすがに現存する最も浩瀚な仏伝なだけあって、上記の出来事もすべて記述を見出すことが出来るが、しかし過去現在因果経のように簡潔な文

で一所に集中的に記されているわけではなく、また出来事の順番が違って、(1)(2)(4)(3)の順番となる。また Mvu (III, p. 334) にも一応上記の四つの出来事が並んでいるが、(1)(3)(4)(2)の順番であり、しかも(3)の内容が、大地震と神々が音楽を奏でたことの二項目をそなえておらず、大地震だけになっている点で MSK や過去現在因果経と伝承が異なる。これら以外の諸仏伝はもっと MSK の記述と伝承が違っている。——さて以上の考察から、第3ブロックの、過去現在因果経との関係の近さがわかったが、これを私たちはどう理解すればよいのか。過去現在因果経は正量部とは無関係であるけれども、発達仏伝として Sarvarakṣita はそれを局所的にこの箇所(第3ブロック)の源泉として用いたのか。それとも、Sarvarakṣita が源泉資料として用いた正量部系の仏伝伝承が過去現在因果経と同系統であるのか。この二つの可能性のどちらも今のところ否定できないが、後者の可能性の場合は、過去現在因果経という、部派不明の仏伝が正量部の伝承と何らかの関わりがあることになる^(註24)。

三つのブロック以外の残りの仏伝素材

以上、三つのブロックを考察したが、これらの三つのブロックの箇所以外の、残りの仏伝素材(9～18、23、24、29～31)は、記述がごく簡略で要点的であることもあって、Sarvarakṣita がソースとして用いた仏伝伝承の独自性を部派的伝承の違いとして具体的に指摘するのがむずかしい。これらの「残り」の部分の全体的な印象をいえば、シンプルさ(簡略性)である。これは特に第2と第3ブロックが新しい発達仏伝の要素によって細部の肥大化を示していることと落差があり、多少の違和感を感じさせる。

三つのブロック以外の、仏伝素材の「残り」の部分に関して言いうる全体的な特徴は、仏伝としての基本的な伝承をほぼきちんと押さえていることを感じさせること、また全体の枠組として、律蔵受戒犍度の仏伝伝承(四分律・五分律・Mahāvagga 等に共通して見られる古い仏伝)を踏まえた記述をしていることである。パーリ律蔵受戒犍度 Mahāvagga の仏伝部分が、舎利弗と目連の改宗・出家で終わっているのと同じように、MSK の最期の仏伝素材31はその出来事で終わっている。このことは、これらの仏伝素材のソースとしての仏伝が、舎利弗と目連

の入信で終わっていた仏伝であったものであることを可能性として示唆する。もしそうとすれば、それは、律蔵受戒犍度の仏伝伝承を枠組とする仏伝がそのまま成長した仏伝であったろう。少なくともそれは Lal のように初転法輪で終わっていた仏伝ではない。四分律や五分律の受戒犍度の仏伝も、成道前の仏伝が成道後の仏伝に付加され接続されているので、そのような形で小乗諸部派においては律蔵の中で仏伝が発達していった可能性は大いにある。

MSK が舍利弗と目連の入信で終わっている理由として、一つには、そのように Sarvarakṣita が用いたソースとしての仏伝がそこで終わっていた可能性が考えられるが、しかし別の理由も考えられる。Sarvarakṣita は仏陀の説法が開始されるための因縁として、1250人の教団の成立までを描けば十分と考えたのではないか。そのため、舍利弗と目連の入信で仏伝を切ったのではないか。この後者の可能性の推測がもし正しければ、MSK の仏伝素材のソースを特に直接的に律蔵受戒犍度の仏伝伝承と結びつける必要はなくなるわけである。

さて、Sarvarakṣita のこの「残り」の部分の叙述はたしかに仏伝素材そのものの「古さ」を感じさせるほどに全体的に簡略であるが、しかし見かけの簡略さが必ずしも未発達さ（古さ）を示すものではない注目すべき事例が一つあって、それは仏伝素材14の「神々の王たちに勧請されつつ出家した」である。この仏伝素材14の簡単な記述の背後に、細部がやや肥大化した発達仏伝が存在するのを推測することができる。出家すべき時機が到来した時に、神々によって菩薩が勧請されたというエピソードは多少発達した仏伝であればほとんどの仏伝で説かれるもので、珍しいものではないが、阿含・ニカーヤの時代にはなかった伝承である。特に「神々の王たちによって」勧請されたという表現をキーワードにして調べると、発達仏伝の中でもごく限られた数の仏伝にまで、固有な伝承を絞り込むことが出来る（この点の詳細については仏伝素材14の箇所（上述）に記した）。この仏伝素材14は、三つのブロックに属していない位置にあるために、重要である。三つのブロックだけが発達仏伝な徴候をもつならば、それらを全体のソースと切り離して別に扱うこともできようが、三つのブロック以外にもこの仏伝素材14があるために、三つのブロックばかりを「残り」の部分と安易に切り離して、異なる色調をもつものとして扱うわけにはゆかなくなる。

まとめとして

さて、以上で私たちは、[ブロック1] [ブロック2] [ブロック3] [ブロック以外の残りの部分] の四つのパーツに分けて、それぞれのソースを検討してきた。このうち、ブロック第2と第3は同一の発達仏伝的な色調をもつので、同一のソースに基づいていると見なしてもよいであろう。すると[ブロック1] [ブロック2と3] [ブロック以外の残りの部分]の三つのパーツについて、それぞれが色調が多少異なるので、それぞれは別のソースに基づいていると主張することも出来るであろう。たしかにその可能性はある。しかしまた私は、それらのパーツはどれも同じ様に或る一つの未知の発達仏伝をソースにしている可能性も大いにあると考えている。

[ブロック2と3] が示す新しい発達仏伝の要素とは隔たった古風さが、[ブロック以外の残りの部分] には感じられる。私たちはその両者の間の違和感に基づいて、以下の二通りの解釈をすることができるであろう。

解釈A： 作者が [ブロック2と3] 以外のソースとして用いた仏伝は、全体的に [ブロック2と3] とは色調が異なる、細部が肥大化していない素朴さ・古風さをもつ。それは五分律の受戒法の仏伝に毛が生えたような古い仏伝資料を想像させるものであり、そんなソースの素朴さゆえに [ブロック以外の残りの部分] の部分はこうも全体的に簡略なのではないか。

解釈B： [ブロック以外の残りの部分] の阿含的な簡素さは見かけだけのもので、実は細部が肥大化した発達仏伝がソースであるが、作者はその仏伝を要約し、要点的にし、細部を削ぎ落とした結果、こうも全体的に簡略な叙述となったのではないか。

この二つの解釈は正反対であるが、もしAの見方を取るなら、発達仏伝と古い仏伝との、少なくとも二つのソースがあったことになる。また、もしBの見方を取るなら、発達仏伝一本のソースを認めればよいことになる。私はBの方が真実なのではないかと思う。

このAとBの解釈のどちらが妥当であるかを決めるためには、特に [ブロック以外の残りの部分] の綿密な検討が必要になる。私は上記の [三つのブロッ

ク以外の残りの仏伝素材] の箇所、特に仏伝素材14のもつ、発達した仏伝の徴候を指摘した。仏伝素材14における Sarvarakṣita の叙述は簡素であるが、しかしそれは素材の古さ、素朴さを意味するのではなく、むしろ発達した伝承の細部を切り捨てることにより生じた簡略さにすぎないことが疑われた。つまり発達仏伝の徴候は[ブロック2と3]ばかりでなく、[ブロック以外の残りの部分] の箇所にも指摘しうる。「残り」の部分の簡素さは見かけだけのもので、背後には多少発達した仏伝が隠れていることに気づかされるのは、実はこの仏伝素材14によってだけではない。もう一度、上記の仏伝素材の分析を1から31まで全部読み直してみると、「残り」の部分に関して、仏伝素材14ばかりが例外的に発達仏伝的なのではなく、結構あちこちの箇所に発達仏伝の徴候が隠れていることに気づくであろう。

そのため、私は解釈Bの見方の方が正しいのではないかと思う。この MSK の仏伝部分はその全体が、ある程度発達した一つの仏伝ソースに基づくものとして考えて何ら問題はないのではないか。各パーツについてわざわざ別の種類の仏伝を想定するほどの必然性はないと思う。たしかにブロック間に多少の異質感は感じられるが、それは小乗の発達仏伝がもともと複数の形成層を有することによる違和感であって、全体が一つの作品であるという仮定を否定するほどのものではない。MSK の仏伝部分のソースは、小乗の発達仏伝として特徴的な、局所的に部分的に阿含的な仏伝資料をそのまま借用するかたちで成立した、新旧の仏伝素材が同じ作品内に同時に入り乱れた仏伝であったと考えるべきではないかと思う。[ブロック1]ではソースとして<大本経関係>の阿含・ニカーヤ的資料との関係が疑われたが、しかし阿含・ニカーヤ的資料そのものが直接的に使われているのではなく、その資料をそのまま内側に取り込んだ発達仏伝が用いられていると考えて、おかしくはない。仏伝素材8のような発達仏伝的徴候が見られるのはそのせいである。律藏受戒難度の仏伝を土台にして、そこに<大本経関係>などのいくつかの阿含・ニカーヤ的な仏伝素材を加えて、上座部系の仏陀観を逸脱しない範囲で新しい発達仏伝の要素を付け加えた、小乗上座部系の未知の発達仏伝を私たちが想定すれば、それによって[ブロック1] [ブロック2] [ブロック3] [ブロック以外の残りの部分] の、全部のパーツ

に対する一つのソースとして、うまく説明できるのではないか。

インド仏教諸部派が編集した小乗的仏伝の特徴は、阿含・ニカーヤ的仏伝資料をコアとして、それを取り包むかたちで発達したことにある。そのような仏伝においては、極めて古い聖典的な部分と、新しい時代に加わった発達仏伝の要素との、異質な要素が共存するかたちで入り混じりあっており、後者の発達仏伝の要素がどれほど増大しようとも前者の聖典的な要素を排除することはない。このような小乗の部派仏伝の代表格は、根本有部の破僧事の仏伝であるが、破僧事は、自部派が伝承する律蔵・経蔵の聖典の記述を忠実に踏まえつつ、自部派の古い仏陀観を逸脱しない範囲で民間の発達仏伝の要素を取り込み、教団の立場から制御を加える態度で権威的な仏伝を編集している。このような仏伝は内容的に Lal のように大衆部系の超越的な仏陀観に基づいて、発達仏伝的な要素が阿含的な要素を書き換えながら排除する姿勢で作られた、民間の法師による仏伝とは対極に位置する^(註25)。作者 Sarvarakṣita が MSK 第1章の執筆において一つの未知の仏伝資料をソースに用いたとすれば、それは破僧事のような性格の、小乗上座部系の部派仏伝資料であったろうと思われる。ただし破僧事のように完全に成長しきった仏伝に成る前の、ややこじんまりした、過渡的中間的な段階の上座部系仏伝であった可能性はあると思われる^(註26)。

参考文献

[昨年と一昨年の『哲学年報』論文末尾の参考文献と重なるものは省いた]

- (1) 藤田宏達 [訳] (1984) : 『ジャータカ全集 1』、春秋社。
- (2) Takamichi FUKITA (2003): *The Mahāvādānasūtra. A New Edition Based on Manuscripts Discovered in Northern Turkestan*, <Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden, Beiheft 10>, Göttingen.
- (3) 外園幸一 (1994) : 『ラリタヴィスタラの研究 上巻』、大東出版社。
- (4) 岡野潔 (2004) : 「正量部の伝承研究 (2) : 第九劫の問題と『七佛経』の部派所属」、『佛教文化学会十周年・北條賢三先生古稀記念論文集 インド学諸思想とその周延』、山喜房、2004年3月、173-196頁。
- (5) Ernst WALDSCHMIDT (1953-1956): *Das Mahāvādānasūtra. Ein kanonischer Text über die sieben letzten Buddhas*, <ADAW 1952 Nr.8, 1954 Nr.8>, T. 1-2, Berlin.

注

- (1) 『哲学年報』63輯(2004年3月)と『哲学年報』64輯(2005年3月)に発表した。
- (2) なお MSK 第1章1節～4節と第6章3節、4節の部分は、文献Xと私が名づけるチベット訳の資料に対応する文が存在しない。文献Xは MSK の源泉資料として内容的に密接に関係しているため、私はこれまで MSK 第2章以下の翻訳においては、文献Xの対応する文を同時に訳してきた。しかし以下の MSK 第1章1節～3節の翻訳では、文献Xに対応する文が無いいため、MSK だけの訳になる。
- (3) [教えが説かれるに至った]由来をもち — *nidāna-bhāg*. 世界の生成展開期と帰滅期に関するこの法話には、仏陀によって説法がなされるに至った因縁物語(*nidāna*)が付随している。MSKにおいて、世界の生成展開期と帰滅期の法話は第2章から始まるのであるが、第1章はその法話の由来、因縁物語(*nidāna*)にあたる。それゆえ *Sarvaraṅgita* は第1章の章名を *nidāna* と名づけた。*nidāna* の語義に関しては、前田恵学『原始佛教聖典の成立史研究』、山喜房、440頁以下を参照。
- (4) この *Sarvaraṅgita* の言葉に、私は韻文の仏伝である佛本行経の最初の章(因縁品第一)における最期の言葉、「今我之所説 猶如鸚鵡言 以歡悅仁等 可專意諦聽」(T IV, 55 c11-12)と似たものを感じる。MSK の第1章の名前は *Nidāna-kāṇḍa* (由来の章)であるが、この名称も佛本行経の「因縁品第一」という名称を想起させる。
- (5) インドの俗信では、象の頭の中には真珠があると信じられていた。*Kumārasaṃbhava* I 6ならびに *Mallinātha* 註を参照。
- (6) 本詩節には、*Kālidāsa* の *Raghuvamśa* XVII 57 の影響が明白に見られる。
- (7) この詩節が馬鳴の *Saundarananda* II 49 から着想を得たことはほぼ確実である。それは次のような文である：「その時彼の王にはマーヤーという王妃がおられた。天における神格 (*devatā*) マーヤーのように、瞋恚 (*krodha*) と翳質 (*tamas*) と迷妄 (*māyā*) を離れたお方であった。」
- (8) 写本ABの読みは *nandāguhāyām* である。もし写本どおりに読むなら、「ナンダーの洞窟に [入る] 龍王 (*nāgarājaḥ*) のように」と訳せる。しかしナンダーの洞窟とは何かが不明である。「ナンダー (女神ガウリー) の胎に入る象王 (ガネーシャ) のように」と解釈するのも不可能ではないが、かなり苦しい。そこで、*nando guhāyām* と私は読んだ。
- (9) 私は *pāda c* の *satūrya-nṛttaiḥ* を *vimānaiḥ* にかかる、形容詞的な複合語と解釈した。*Bc* III 20の「ちょうど天空がアプサラスのいるヴィマーナによって輝くように」(*[...] babhāse viyad vimānair iva sāpsarobhiḥ*) という文がこの解釈の典拠となる。しかし *pāda d* にある *ca* が *satūrya-nṛttaiḥ* と *vimānaiḥ* の二つの語の対等な列挙に使われていると解釈するなら *pāda cd* の文を別様に訳せる：「天界の美女たちの、楽器を伴う舞い踊りによって、また花で飾られたヴィマーナによって、天空は輝いた」。
- (10) この技巧的な詩節は二重義をもつ。裏の意味において、王子の結婚という出来事が示される。また「学問・技芸により」(*vidyā-kalābhiḥ*) という言葉は、王子の結婚に先だって学問・技芸を競う婿選び競争が催され、それに勝利した結果、妻を娶ったことを示唆すると私は解釈した。

- (11) 初期の仏典に出てくる欲界の王マーラ（魔）は、後にヒンドゥー教の愛欲の神カーマと同一視されるに至った。Bc XIII 2 や I 27 でその同一視が確認できる。
- (12) この詩節はヴィシュヌ神の乳海攪拌の神話を比喩に用いる。『山の王』とは Mandara 山を、『海』とは乳海を意味する。
- (13) 原文を tanu-prabhā と読むなら「身体の光明が」という意味になるが、atanu-prabhā と読むなら「大きな光明が」という意味になる。第二部の研究の「仏伝素材19」の解説を参照のこと。
- (14) 「アーラヤに喜びをもつ世の人々を、ある期間、傍観していた」(prajām athālayārāmāṃ kaṃcit kālam upaikaṣata) という文は、古い聖典に説かれる、成道直後の仏の、民衆への説法の躊躇のエピソードに基づいている。それはパーリ聖典では次のように説かれている：「わたしが到達できたこの真理は、深遠で、見がたく、理解しがたいものであり、[欲望にかき乱されず]静まっておき、格別なものであり、推論を超えた領域に属し、微妙であり、智者のみが知り得るものである。しかしこれら世の人々は**アーラヤ**(常識的世界にしがみついていること)を喜び、アーラヤを好み、アーラヤに満足している(ālayārāmā kho panāyam pajā ālayaratā ālayasammuditā.)。しかし、**アーラヤを喜び**、アーラヤを好み、アーラヤに満足している世の人々にとって、この到達地点、すなわち『これを条件(縁)とすること』『条件づけられて生じること』は見がたい。この到達地点もじつに見がたい——すなわち、あらゆる形勢力(行)を鎮めること、生存の素因たる執着をすべて捨て去ること、妄執を滅ぼすこと、愛欲を絶つこと、止滅[としての]安らぎ(涅槃)。もしわたしが真理を説きしめしても、ほかの人々はわたしを理解してはくれないであろう。それはわたしにとって疲労となろう。それはわたしにとって煩いとなろう」(Vinayaṭṭhaka, Mahāvagga, ed. PTS, I, pp. 4-5)。詩人 Sarvaraṣita は、このアーラヤという聖典の言葉が「住居」という別の意味をもつために、巧妙な言葉遊びとして、この詩において、「住居(アーラヤ)を喜ぶ地上の人々を空から見下ろして、雲はしばし傍観しているように見えるが時機が来れば甘露の雨を注ぐ」というイメージを、しばし世の人々への説法を躊躇しているように見える、初転法輪の前の仏陀の姿と重ね合わせることに成功した。
- (15) この詩節で用いた月と星々の比喩は、Bc XVII 40 の比喩を想起させる。
- (16) PARANAVITANA & GODAKUMBURA (1963) のジャーナキー・ハラナ の出版本 (*The Jānakīharāṇa of Kumāradāsa*, The Government Press, Sri Lanka) の序文 pp. lxvi-lxvii には、碑文 (Mādilla の石柱碑文等) から知られる、Kumāradāsa 作 (あるいは Buddhadatta-sthavira 作) の Śrīghananandamahākāvya という未知の仏教 Mahākāvya の梵文テキストの第1章の冒頭の第1～第5詩節が紹介されているが、それは Kapilavastu の都城の描写から始まっており、漠然と MSK の第1章第2節と内容的に類似している。MSK の作者は馬鳴の Saundarananda の他に、この未知の作品からも影響を受けた (あるいは、与えた) 可能性がある。
- (17) 具体的に<大本経関係>と私が呼ぶ文献とは、パーリの Mahāpadānasutta (DN 14)、梵文 Mahāvadānasūtra、漢訳長阿含・大本経、漢訳七佛経、漢訳毘婆尸仏経、漢訳七佛父母姓字経、漢訳増一阿含 45(4)経、漢訳中阿含・未曾有法経、パーリの Acchariyabbhuta-

dhammasutta (MN 123) である。

- (18) 本論文の末尾の参考文献の (2) と (5) を参照。
- (19) ただし有部の施設論には「如經所説。菩薩能知入胎住胎出胎等事」とある (XXVI, 518 b21)。正念を保って入胎したという事を有部が教理として認めなかったわけではない。
- (20) 出家を促すために神々が来訪し、菩薩に出家を勧めたというエピソードを説かない発達仏伝としては、Bc や Nidānakathā がある。それらの仏伝は、神々が直接的に菩薩に語りかけて、出家してくれるように懇願したのではなく、彼の出家の際に神々は見守り、ひそかに手助けし、後押しするための色々な奇蹟を生じさせることで、励ます役割を(間接的なかたちで) 演じた、という見方を取る。
- (21) 修行本起経は「至年十九、四月七日、誓欲出家。至夜半後、明星出時、諸天側塞虚空、勸太子去。(中略) 於是諸天言。太子當去」(T III, 467c6-14) と説き、太子瑞応本起経も「至年十九、四月八日夜。天於窓中、叉手白言。時可去矣。(中略) 便起瞻沸星。夜其過半、見諸天、於上叉手、勸太子去」(T III, 475b2-20) と説く。
- (22) 梶山雄一、小林信彦、立川武蔵、御牧克己 (1985) : 『ブツダチャリタ』、講談社、166 頁。
- (23) 本論文末尾の参考資料 (4) にある岡野 (2004) の論文、182頁の [理由 3] を参照のこと。
- (24) 第 2 ブロックと第 3 ブロックの検討において、過去現在因果経との伝承の近さが指摘された。そこで、もう一度第 1 ブロックに戻り、そこにある仏伝素材 1 ~ 8 の全体に関して、過去現在因果経との近さを確認してみた。すると、仏伝素材 4 (誕生時の大光明) と仏伝素材 5 (誕生した菩薩を神々の首長たちが抱持した) と仏伝素材 7 (香風、天女たちの音楽と踊り) については、過去現在因果経に一応似た記述を見出せるが、しかしそれ以外の仏伝素材については、<大本経関係> のようにぴったりした記述が見出せないことが確認された。従って、少なくとも第 1 ブロックにおいては、過去現在因果経の伝承が Sarvarakṣita によって使われた可能性はないと考えてよい。
- (25) 現在の Lal は後の時代に大衆部系の阿含的仏伝資料が意図的に付加されたものである。Lal の本来のかたちにおいては、そのような阿含的な仏伝資料と発達仏伝の要素とが共存していたわけではない (拙稿「普曜経の研究 (下)」、『文化』第 53 卷 3・4 号、1990 年、249-268 頁を参照)。この点が、Lal のような民間の説法師が作った仏伝と、破僧事のような部派教団が作った仏伝との違いである。
- (26) 上座部系仏伝というわけは、MSK のこの仏伝の土台にあるのは上座部系の古風な仏陀観、釈尊を歴史的・人間的に見る仏陀観であるように思われるからである。上座部系と大衆部系とでは仏陀観が根本的に異なるが、正量部の仏陀観は有部の仏陀観に近かったと思われる。MSK の作品の全体を通して、大乘臭は全く感じられない。